四旬節第５主日

福音朗読　ヨハネ 12・20-33

2024.3.17 9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日の福音は「祭りのとき」っていう、そういう言葉から始まっていますが、この祭りというのは「聖書と典礼」の解説にも出ていましたけれども、過越の祭りです。でも、ヨハネの福音書は、そういうエルサレムの神殿で行われている行事に「ユダヤ人の」っていうのを決まって付けるんです。だから、この祭りについても「ユダヤ人の過越の祭りのとき」っていうふうな説明で 11 章の――今日は 12 章の 20 節からでしたけれども――終わりのほうに出て来きます。そのときの出来事っていうことになるんですけど、過越の祭りの意味というのは皆さんもご存知だと思いますけれども、旧約聖書で、イスラエルの民――ユダヤ人たちの先祖です――がエジプトで奴隷であったのに、神様の恵みによってエジプトから解放されました、そして神の民になりました、っていうことを記念する、そういうユダヤ教にとっての、ユダヤ人たちにとっての一番大切なお祭りです。そのときには、自分たちの先祖が外国の奴隷だったけれども、神様の恵みによって救い出されて特別な民になったっていう、そういうお祭りの内容から、民族主義って言いましょうか、「自分たちこそが」っていう、そしてまたその当時、イエス様の時代は、エジプトではなくてローマに支配されていたから、やがてこのローマの支配を打ち破って、っていう、そういう機運――ナショナリズムって言いましょうか――が高まるときでもあったというわけです。来週から聖週間で、わたしたちもその過越のときのことを思い出していきますが、ローマ総督のピラトっていうのが出てきますけど、ピラトは普段はエルサレムには居ないんです。普段はカイサリアっていう海のとこの町にユダヤのローマ総督のほんとの場所があって、でも、過越の祭りのときにはピラトが兵隊を連れてエルサレムにやって来る。反乱が起きやすい、そういう雰囲気が、そして人々がたくさん集まって来て、っていうときなので、治安の維持のためにエルサレムにやって来る、っていうぐらいなものなんです。

その過越の祭りにイエス様がやって来て、人々が枝を持って大喜びで迎えた――わたしたちも来週の日曜日にはそれを思い起こして枝の主日をやりますけども――迎えた。みんなイエス様を見てる。それは、この方が特別な力をもってローマから自分たちを救い出して、そしてもう一度偉大な国にしてくれるっていう期待を持ってイエス様を見ていた人がずっと多いわけです。そんな中でギリシア人――ギリシア人っていうのは必ずしもアテネとかその辺の人ってわけではなくて、聖書の中ではユダヤ人以外の外国人を全部ギリシア人って言う場合があるので、何人（なにじん）だかは分からないんですけども――とにかくユダヤ人以外の外国人がイエス様に会いたいと

――これは弟子になりたいっていうことです――やって来たというのは、その雰囲気の中では大変危険なんです。人々がこの外国を打ち払ってくれるって期待している。その中で、その期待の中心にいるイエス様が外国人を、ユダヤ人で無い者を迎え入れるっていうのは、特にこの時期は危険だし、人々の人気が落ちちゃうっていう可能性もある。だから、フィリポに最初言って来て、フィリポがアンデレに相談して、二人で、随分なんか回りくどいです。

もしこれがガリラヤでの出来事だったら、外国の人がイエス様に会いたがっていますよ、ってすぐ連れて来たと思うんです。でも、「この時期に、どうする？」っていう弟子たちの間の心配というのが見て取れるわけです。でもイエス様は、そんな周りの人がどう思うかっていうのを気にしない。「今ちょっと、この過越の祭りの時期はまずいから、終わってからゆっくり会うからね」ではないんです。みんながどう思うか、ではない。むしろイエス様は、「この過越の祭りっていうのはユダヤ人の過越じゃなくて、すべての人の過越なんだ。神様が救ってくださる。誰かが自分のために他の人を支配して利用する、そういう社会から平等な者として助け合う社会へ、罪の奴隷から神と共に生きるほんとの人間の自由へ、というのはすべての人を招かれた神様のみこころなんだ。それをユダヤの人たちの先祖の経験ということで示された。本当はみんなのお祝いなんだ。自分たちだけの、っていうことから、その殻を破らなきゃいけない」ということを示すためにエルサレムに来られたとも言えるでしょう。その意味では、一粒の麦っていうのは、ユダヤ人の過越の祭り、でもそのことを手放して、いただいたその恵みはみんなのものなんだっていうふうに手放さないと、その恵みは豊かになっていかない。でもそのために、イエス様ご自身がまず、ご自分が過越のときに捧げられるいけにえのように、ご自分の命をもってご自分の父である神様との近い関係をすべての人に分け与えることから始める、っていうのが今日のイエス様が言いたかったことなんだと思うんです。

わたしたちもそれぞれ、一人ひとり神様から恵みを頂いている。それを自分のためだけに留めようとするならば、それはほんとの意味で神様の恵みの豊かさに足らない。でも、イエス様がご自分の命を通してわたしたちを招いてくださったその繋がりっていうのは、一人ひとりが自分のためだけに生きるのではない、いただいた恵みを自分のためだけに使うのではない、自分のためだけっていうふうに考えるのではない、そういう者へと――それはある意味で手放すっていうことですから苦しみを伴います――でもそこへ呼んでいらっしゃるということを思い起こしたいと思うんです。

だから、わたしたちが今日お捧げするミサも、そして来週からお捧げする過越、復活祭、聖週間と復活祭の典礼もカトリック信者のためだけではなく――もちろん集まるのはカトリック信者だと思うんですけども――そのお祈りの心はすべての人のために、そして自分たちもすべての他の人のために生きる、そういう者に変えられていきますようにっていう思いをもってお捧げする必要があるというか、それが

イエス様が望んでいらっしゃることだし、そのためだったら父である神様はいつも助けてくださるんだ――「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。その者を父は大切にしてくださる」（ヨハネ 12・26）。今日のみことばですね――、いくらでも神様が助けてくださるということに信頼を置きたいと思います。

わたしたちが、それぞれ自分のためだけに生きるのではない、他の人といただいた恵みを分かち合うようにイエス様が一人ひとりを呼んでいらっしゃる、そのことを思い起こしながら、そのイエス様と共にあることができますように、変えられていく、その導きを願い合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/